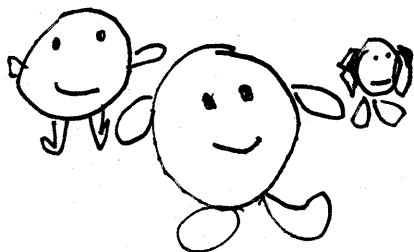


今も迷いながら

高橋 和仁



私は、幼稚園教員養成過程卒業後三年間小学校に勤めた。その後本園にきて幼稚園教諭として二年。

まだまだ経験の浅い未熟者だ。園に来て一年目はまだ二か月も経たないうちに三百人近い保育関係者の集まる研究会で、地に足の着かない保育をしてしまった。案の定、分科会でも攻めに攻められ、満足に答えられないという、苦しい経験をした。

しかし正直に感じることは、子どもたちとの生活は、研究会で言われたような「良い保育」とか「適切な援助」などの言葉では語り尽くせないものがあるということだ。今なら分科会での指摘を少し違う角度から眺めることができるような気もする。ただ毎日の生活は、相変わらず迷いの連続である。

ここではそうした迷いの道中で私自身が感じたことと、悩んだことを正直に述べてみたいと思う。

◎保育者は真面目なんだなあ？

私は保育者として不真面目なのかなと思う時があ

る。著名な大学の先生の講演会等で、時にはこの人
保育現場のことを本当に知って話しているのかなと
思うような内容でも（私が未熟でそう思うのかもし
れないが）、周囲の保育者たちが、講師の先生の一
語一句を逃さぬようにペンを走らせている姿に圧倒
される。そして私も、ついペンを走らせる真似をす
ることがよくあった。こんな時私はいつも、周囲の
保育者の真面目さに敬服してしまふ。

新参者の私にとって保育とは、子どもたちとの間
に繰り広げられる生活感あふれる世界であり、それ
だけに、口では表現できないような複雑な感覚にい
つも浸かっている。とてもすすきりしたものだとい
はない。私にとっても子どもたちにとっても、一瞬
一瞬が勝負で敵しいものがあると感ずる一方で、喜
びや面白さもいっぱいある。ある時は、私自身の生
き方までも考えさせられる場面にも出会う。時とし
て、たじろいでしまうこともある。次にあげる五歳
児の事例は、そんな子どもたちのやりとりである。

＊

十月二十九日（平成四年度「もり組の記録」より）

展覧会で使う石を拾いに川の上流までいく。そこ
で健弘が全長十五センチほどのトカゲを見つけた。

健弘は「持って帰る」と言う。隣で、貴文と基樹、
香織が口論していた。もう香織は泣いている。

健弘の捕まえたトカゲを、貴文は『園に持って行
こう』と言ひ、基樹と香織は『絶対に自然に返すべ
き』との立場。互いにとても熱っぽく自分の主張を
する。「だってさ、家に持って帰ったって死んでし
まうかもしれないじゃん」

「ちゃんと飼えばいいじゃんか」

「ちゃんと飼うってどういうこと？」

「ちゃんと飼うって、餌あげたり水あげたりするん
だよ」

「でもかわいいそうだよ、だってとかげだってこうい
うところがいいんだから」

「じゃあ捕まえることが何でも悪いんか？」

「おお、そうだよ」

「じゃあ、どうして綱とかがあるんだ？ どうしてだよ、言ってみろよ。」

とても真剣なやりとりであり、それぞれの主張にももっともなところがあつて、私はどうしたらよいのか迷つてしまい、この議論には入らずにいた。

*

このように子どもたちは、もう大人も意見が分かる問題を時によつて考えようともしている。そんな時私は、誰に頼ることもできず、そこから逃げることもできない。それはまた、どちらが正しいというものでもなく、私自身の価値観に頼つても解決できないことにも気付かされる。

保育者は、じつはこのような場面に出会う時、自分が試されるような恐ろしさをどこかで感じ、悩み考え込んでしまうのではないか。本当に保育者が困つてしまうようなこういふ疑問にこそ、納得いく答えを研究者に出してもらいたいような気もする。

保育者は、真面目に聞くことよりもむしろ、真面目に問うことが時として必要なのではないだろうか。

◎『丁寧な保育』って、どんな保育？

私はどちらかというところばらな性格だ。いやまったくずぼらだ。先日の研究会でも「もう少し丁寧な保育をしたらどうか」という指摘を受けた。「こっちの方で子どもが暴れているのにそのままにしている」とか、「こんな（寒い）日に子どもに裸になることを許した」とか、「子どもが集まる時に、集まらないまま集会をした」とか、本当に雑さが目立つ保育だったようだ。

私自身「そうだな」と反省しながらも『丁寧な保育』って何だろう、と半分参会者の意見に疑問を持ちながらも言われるままに聞いてしまった。何だか自分の考える「丁寧さ」とは違っている気がしたのだが。

保育の「丁寧さ」って何なのだろう。

次は、今年の研究会当日の出来事である。

私はこの時、そばで見ている一つのドラマを見たような気がした。

*

五月二十日（平成六年度「ばら組の記録」より）

康夫はこの四月に四歳児に入ってきた。入園当初から、気持ちが不安定なのか、泣くと私に「抱っこ抱っこ」とスキンシップを求めてくる。また、自分の思うようにならないと、誰にでもパンチをするので、よく見ていないといけない子でもあった。

今朝は、康夫の滑りだしも順調。大形積み木を並べて自分の橋や道を作っていた。機嫌もよさそう。

しかしその状態は、牛乳タイム後に変化する。牛乳を飲み終わるなり「先生、抱っこ抱っこ」と来た。

仕様がなく抱っこしてあげると、次の遊び場を見つけたようだ。「先生おろして」と言うなり外のマットに走って行ったが、外のマット行くなりポコッとそこにいた一夫をたたいて「ここはダメ、ぼくの所

だから」と言う。不意に後から頭を叩かれ一夫は泣いてしまう。私はそれ以上康夫をそこにおかず部屋に連れていった。

すると今度は、ブロックで作ったピストルを持った知雄に「どうしてお前だけそんなん持ってんだ」と言い、知雄を突き飛ばし、それを取ろうとした。私は康夫をこれ以上放っておくとおとなしい知雄が一方的にやられるだけだと思い、私は割って入った。すると康夫は反省もなく、また「抱っこ抱っこ」とごねた。兎のいるところに連れていくと、やはりさっきのマットが気になるらしく「あそこに行きたい」と言う。それに「抱っこでいく」との甘えぶり。やっとおろして、マットのところに自分で行かせた。またも女の子がいるのをけちらかし、「ダメダメここは僕のところだからダメ」と言う。

そこは、女の子たちが平均台から飛び込むようにして海と飛び込み台をイメージして使っていたが、康夫が暴力を奮うので、みんな逃げていった。そこ

に慎介がやってきた。「入れて」と普段あまりしゃべらない慎介が機嫌良さそうに入ってきた。すると康夫が「ダメ、ダメ、ダメ」と自分がまだ強いと言うような調子で言う。慎介は一遍に不愉快そうになる。すぐ後に優作と諭も「入れて」と言っていて来たが、そこでも「ダメ、ダメ」の康夫である。

慎介は「とうしてダメなんだや」とそのわけを康夫に問いたしたが、康夫は「ダメ、ダメ」の一点張り、ついにはこれまでと同じように手をだして慎介に殴りかかった。一発は見事に慎介の背中に入ったが、その一撃で慎介は怒り、「とうしてダメなんで」と大声で言って康夫にかかっていった。この時だけは、私もその喧嘩を止めにかかろうとは思わなかった。慎介の方が康夫より喧嘩が強い。これまでの康夫が起こしてきた喧嘩と違う結果が得られそうだという読みがあったのと、ここで康夫はいい勉強をするのだろうと感じたからである。

慎介は「とうしてダメなのか言わなきゃわかん

ねーよ」と康夫を投げ飛ばす。康夫は泣きながら「ダメー、ダメー」の連発である。最後には「みんなのとこじゃねーか」と慎介は言いながら康夫を投げていたが、康夫には通じたかどうかはわからなかった。



*

この事例が研究会の格好の議論のテーマとなりそうだと感じていたのだが、なぜかあまり話題にならなかった。私は、子どもたちが園の中で自然に学び合う場を保育者としてどのように考えているのか話し合ってみたかったのだが。

自分が寒いと思ったら、子どもは自分から水に入るのをやめるし、靴をはきたくなれば、自分から履くであろう。少々乱暴な考えのようだが、子どもはそこから学んでいくのではないかと思う。先にも述べたが、保育者は真面目な人が多く、子どもたちへの速効性や同一性を考え過ぎる気がする。しかしどうだろう、私たちだってそんなにすぐに変わったり直ったりできるであろうか。痛い目にあって初めて考えるということはないだろうか。自然のままというのは、そのまま放っておくことでなく、子どもの学びの効果的で実質的な学びを求めるには、そのままのように一見しておくことが、ある意味では大切

なのではないだろうかと思うからだ。『丁寧な保育』は、その子の育ちの中で大切と考えるものを、ごく自然の中で子どもが偶然に出会うものを通して学んでいく過程を、注意深く見守りながらフォローしていくことにあるような気が私にはするのだが、どうであろうか。

◎真面目に問い続けること

最近、私が求めていたものへの答えを、子どもたちが教えてくれることに少しずつ気付き始めた。外にばかり師を求めてきたが、じつは私のすぐ目の前に師がいることによりやく気付いたのだ。

私にとって、子どもたちは一緒にその場を生きる同胞であり、時には無理難題を考えさせる師でもある。しかしお互いに考え、悩みながら日々を過ごしているもの同士なので、相手の気持ちもよくわかるように思う。困っていることはみんな解決しようとする気持ちだが、私と子どもたちの両者に自然にわ

いてくるのだ。

次にあげる事例は、子どもたちと共に考え合ったものである。(紙面の都合で、簡略してあるが)

*

(平成五年度「もり組の記録」より)

- “せんせい さようなら……………①
みなさん さようなら……………②
びよこたん さようなら……………③
インコさん さようなら……………④
きんぎょさん さようなら……………⑤
〈ともぎ〉せんせい さようなら……………⑥

(注)このへ内はその日の当番の名前

これは私たちクラスのクラスのお帰りの挨拶だ。年度当初は、“せんせい さようなら、みなさん さようなら”というばらぐみ(四歳児)からのままのフレーズだったが、五月ごろから、その日の当番の人にも言ったら面白くて楽しいし、“せんせい”と言われた人も何だか気分がいいということで⑥が加わ

りずっと①②⑥の形が続いてきていた。

それが、飼っていた兎(名前はびよこたん)が死んで埋葬した日(十二月十三日)から、「びよこたんにもさよならを言おう」という声が出て、「びよこたんさようなら」が加わった。そのうちに今度は、「びよこたんにさよなら言うなら、インコや金魚にもさよならを言わなくっちゃ」という意見が出て、④⑤のフレーズも加わる。

子どもたちのほとんどはそれほど抵抗なく、むしろ唱えるように長い台詞を言うのが楽しいとさえ感じていたようだ。しかし、ある日のお帰りの会に事件は起こった。

二月十六日

成寿が突然手を挙げ、「あのさ先生、お帰りのあいさつ長いからさ、びよこたんとかのところなしにしようよ」と大きな声で言った。

その言葉を聞いたとたん「ええーっ」と大きな

ブーイング。「どうしてそんなことを言うんだや」とか「成寿がなんで勝手に決めるんだや」という声もそれに交じって聞こえる。しかしもう降園時間もきていたので、成寿の提案については明日みんな考えてよということにして、その話を打ち切った。

二月十七日

「成寿君前にきて」「みんな昨日成寿君が言ったこと覚えてるかな」「覚えてるー」

「なあちゃんは何言ったんだっけ？」

「あのね、お婦りの挨拶が超、超ー、長いんだよ、だからびよこたんとかインコとかのところカットしたらしいの」

「ええー」また昨日と同じブーイング。何人かの子がすぐに反発してぶつぶつ言い始める。手を挙げるように促すと、五人の子が手を挙げ、美保を指名すると、いきり立ちながら強い調子で言う。

「あのさ、成寿君はそういうけどインコとか金魚とかがかわいそーじゃん、それにびよこたんだって死

んだってちゃんと見ているかもよ」

「そうだよそうだよ」と美保を支持する声しきり、もう一人明菜に聞く。明菜も感情をこめて、

「成寿君、かわいそうだと思わないの、びよこたんだって天国からちゃんと見ているんだよ」

聞いていた成寿がすぐに反論する。

「だってさ、インコだって金魚だって人間の言葉、わかるわけじゃないじゃん。インコはインコ語だし金魚は金魚語だから、さよならって言われたってへバカくそまぬけ」って言われてると思ってるかもよ」それを聞いたみんなは一段とエキサイトする。友弘が「成、おまえかわいそうだと思わのんか」と大声で言った。

私は、思いがけないみんなのエキサイトぶりに少々驚いて、時間の経つのも忘れた感じだった。真向から議論が対立していたにもかかわらず、みんなでひとつのことを必死になって考えていたことで、逆になぜかクラスがひとつになったようにも感じら

れた。

二月十八日

昨日に引き続き、互いにゆずらない平行線の議論が続いた。しかし「挨拶が長い」ということだけは了解する者がでてきた。

二月十九日

いよいよ今日で、四日目。みんなでどうしたら納得いくか、真剣に話し合った。

明菜が突然「先生いいこと思いついた」と手をあげる。「あのさ、①と②のところあわせて『先生みなさん さようなら』とすれば」と新提案。すると、それがいいということで、「すごい」の拍手が起こった。それから次々に意見が出て話し合わせ、ついにみんなに承認される挨拶の言葉が完成したのである。

《改造後の挨拶》

“せんせい みなさん さようなら……(1)

びよこたん インコさん 金魚さん さようなら

“○○”せんせい さようなら”……⑥

四日間にわたる、延べ三時間の白熱した議論の後にできた私たちのクラスの挨拶である。

*

このように私は、子どもたちに助けられながら生活している。いつもわからないことを子どもたちや園の先生方に正直に言うようにしている。自分がわからないものを正直に問い返してみたり、自分なかも問い続けていくと、何か保育にとって大切なものがみえてくるような気がする。

知ったかぶりをしないで“真面目に問うてみる”気持ち、そこに保育の原点があるように、今は思っている。

(新潟大学教育学部附属幼稚園)